

# 鹿児島県の水車利用に関する研究

## 第1報 北薩地域について

松村 博久・門 久義

### A STUDY ON THE UTILIZATION OF WATER WHEELS AND TURBINES IN KAGOSHIMA PREFECTURE 1 ST REPORT, ON THE CASE OF THE NORTHWESTERN PART OF KAGOSHIMA PREFECTURE

Hirohisa MATSUMURA and Hisayoshi KADO

The utilization of water wheels in Kagoshima Prefecture began first in the seventeenth century. During that time water wheels were used for sugar cane presses, driving bellows and pounding gold ore. From the feudal clan period to the Meiji, Taisho and Showa periods, water wheels and turbines began to be used for many usages, e.g., rice-polishing, milling, producing bone meal, sweet potato starch, incense sticks, lumbering, driving mechanical dolls, pumping, generation of electricity, and so on. But they were to be finally replaced by steam engines, internal combustion engines and electric motors.

Such a decline in water wheels was owing to their special qualities, i.e., inability to increase their power greatly and the requirement of a nearby water supply, and moreover depending on the decrease of their users.

Under such circumstances, research on the utilization of water wheels and turbines up to the present seems to be important, because this data is useful in the history of technology and usable for developing local energy in the future.

In this report, the utilization of water wheels and turbines up to the present in the northwestern part of Kagoshima Prefecture is studied. It is shown that there are a hundred ninety four locations where water wheels are used for pounding gold ore, a hundred and one for rice-polishing and milling, ten for spinning, twelve for producing bone meal, and so on; the total number of these wheels and turbines is three hundred forty two.

#### 1. ま え が き

鹿児島県において水車が使われ始めたのは、17世紀末から18世紀初期の頃であり、奄美大島地方での砂糖きびの搾糖用<sup>1)</sup>、県内各地でひそかに行われたたたら製鉄のふいご駆動用<sup>2)</sup>や金山での金鉱石の搗鉱用<sup>3)</sup>などに利用されていた。その後、藩政時代から明治・大正・昭和にかけて、精米・製粉・精麦等農産品加工の動力用から、骨粉、樟脳、澱粉、製材、線香、火薬等の産業動力用、さらには、からくり人形の駆動用、田畑への揚水用、極めて小規模な発電用など、多方面にわたって水車は広く利用された。しかし、これらはや

がて蒸気機関や発動機、そして電力へと切り替えられ、現在ではほとんど目にする機会がなくなっている。このような水車の衰退は、近代化に伴う産業動力の大出力化への要請にこたえられなかったことや、水利の便利な場所にしか設置できないこと、さらには水車を利用してきた小規模な産業自体が経済的に成り立たなくなってきたことなどに、起因しているものと考えられる。

以上のような歴史的変遷を踏まえたうえで、過去における水車利用の実態をできるだけ詳しく把握し、将来における再開発の可能性について模索することは、今日、十分に意義あるものと考えられる。このような

観点から、鹿児島県における水車利用の実態を調査して、その利用形態や傾向と各地域の歴史・地理的要因との関係について、すでに報告<sup>4)</sup>した。

本報告は、この調査によって得られた詳細なデータを埋没させることなく、鹿児島県内各地の水車利用実績を明確に記録しておくことを、最も大きな目的とする。そのため、膨大な資料を市町村単位で整理し、さらに県内を北薩、薩摩半島北部、薩摩半島南部、霧島・姶良、大隅半島北部、大隅半島南部、離島部の7地域に分けて、順次報告する。

## 2. 調査期間および方法

本調査は、昭和62(1987)年夏から平成元(1989)年春にかけての2年間で行われた。調査は、各種資料の調査と現地での聴取・実地調査の二面から行った。

資料調査は、各市町村の郷土史誌、鹿児島県勸業年報<sup>5)</sup>、鹿児島県統計書<sup>6)</sup>、各種出版物等を対象とし、特定の水車用途や区域のものについては使用時期・台数などかなり詳しく知ることができた。

現地調査では、鹿児島県内の各市町村毎に、郷土史家や古老を数多く訪問し、各種関係資料の提供を受けるとともに、記憶に残っている水車の設置場所や使用時期、大きさ・形式・用途等について詳しく聴取し、それに基づきできる限り実地調査を行った。これによって、水車利用当時の設置状況や現況、再開発の可能性などを詳しく視察することができた。反面、事情聴取は健康な古老の方に対して行うため、水車利用の時期は、必然的に明治末頃から昭和までに限定されており、地域によっては詳しい古老の方が亡くなっていたために、調べるすべのない場合もあった。

## 3. 北薩地域の水車利用実績

県北西部の4市11町についての調査結果を、各市町単位で表および図にまとめて示す。表中の番号は、図中の番号と対応している。図中の●印は水車の設置場所を、表はその詳細を表している。

### (1) 出水郡東町(長島, 表1, 図1)

表中の番号で1-1, 1-2は同じ場所を意味し、この場合は水車の所有者が替っている。後掲の表についても同様に、水車設置場所が同じで、水車の更新、用途の変更、所有者の交替等があった場合を年代順に並べたものである。なお、図1において東町の水車には、○内に番号を付してある。

### (2) 出水郡長島町(長島, 表2, 図1)

東町と長島町は、ともに長島にあり、水利の便が比較的に悪いので、水車の利用は少ない。ここは地理的に熊本県天草との交流が盛んで、2の中村氏は牛深に米を出荷していたそうである。図1では、□内に水車の番号を付してある。

### (3) 出水郡野田町(表3, 図2)

### (4) 出水郡高尾野町(表4, 図2)

野田町と高尾野町は御手洗川とその下流の野田川に境に隣接しており、とくに高尾野町は平野部が広く、精米用水車が多い。なお、表4は「高尾野町郷土史」<sup>7)</sup>に詳しく記載されているものと現地調査結果とを照合・検討した結果をまとめたものである。なお、図2の高尾野町飛地の江内浦窪地区には、昭和40(1965)年頃まで揚水水車による灌がいが行われたが、詳細は調べることができなかった。また、図中○内の数字は高尾野町の、□内の数字は野田町の水車設置場所を、それぞれ示している。

### (5) 伊佐郡菱刈町(表5, 図3)

川内川上流にある菱刈町は、肥沃な平地部と網の目のように広がった支流があり、水車の用途も精米、骨粉製造、線香製粉、搗杵など利用範囲が広く、比較的古くから栄えた土地であろう。

たぶ線香製粉用木製上掛け水車が1台現存(休止・一部破損)している。

### (6) 大口市(表6, 図4)

川内川の鶴田ダム湖上流にある大口市は菱刈町に隣接し、川内川の支流、羽月川が放射状に広がった大きな盆地である。そのため、水量が豊富で伊佐米の産地として鹿児島県では重要な穀倉地帯である。さらに、明治時代には多くの金山が開発された。したがって、精米用水車とともに搗杵水車が、かつて多数使用されていたことがわかる。

精米・製粉・精麦用縦軸フランシス・タービンが1台現存(休止)している。

### (7) 出水市(表7, 図5)

出水市の場合、米之津川の支流平良川上流から取水した五万石溝に、13台も水車が設置されていた。表7の1-13は、一番上流側から下流に向かって設置されていた順になっている。これらのほとんどは自家精米用であり、広大な出水平野の穀倉地帯を背景にした精米の必要性がうかがえる。

### (8) 阿久根市(表8, 図6)

阿久根市は平地がかなり狭く、阿久根港に流れ込む高松川とその支流の山 downstream に、5台の精米用水車が設

置されていた。しかも、これらは適度に分散しており、各集落の精米をまかなう程度だったと思われる。

精米用横軸タービンが1台現存（休止）している。

(9) 川内市（表9，図7）

川内市は川内川の河口にあるが，小さな支流が全域に広がっており，水車の設置条件は良さそうである。しかし，平地は比較的狭いために，精米より精麦を主用途とする水車がほとんどと思われ，平地の多い川内川の南部に集中している。これらの水車はすべて，大正時代に廃業したようである。

(10) 薩摩郡鶴田町（表10，図8）

鶴田町は川内川上流の鶴田ダムから下流に位置し，水田が多い。伊佐平野から川内平野への傾斜地にあり，川内川の本流は低いが支流が多いので，これを利用した精米用水車<sup>8)</sup>が多くあった。

(11) 薩摩郡宮之城町（表11，図9）

宮之城町の中央部を横切っている川内川にほぼ沿って，かつて8ヶ所の水車場があり，用途も精米，骨粉，綿打ち，製麺・竹箸製造，製糸など多岐にわたっていた。また，紫尾山の南斜面を源流とする河川にも，精米・製材そして発電の水車があった。

発電用ペルトン水車と精米・製粉・精麦用縦軸フランシス・タービンが，現在も稼働している。

(12) 薩摩郡東郷町（表12，図10）

東西を宮之城町と川内市に挟まれ川内川の北岸に接する東郷町は，平地が少なく，精米用水車は北部の集落に2ヶ所あっただけである。しかし，川内川周辺には骨粉，製糸，製茶工場の水車が設置されていた。6の製茶場で25台の水車が使用されていたという記録<sup>6)</sup>は，恐らく記載ミスであり，1台程度であったと思われる。

(13) 薩摩郡祁答院町（表13，図11）

祁答院町は，宮之城町の南に接し川内川の支流の源流と蘭牟田池しか持たない山あいの地である。それ故，精米用水車は少なく，僻地であるがための発電や藩政時代からのたたら製鉄の水車ふいごなどがあった。5の製糸場の水車11台の記述<sup>6)</sup>は，誤りと思われ，実際には1台程度だったであろう。

(14) 薩摩郡入来町（表14，図12）

後川内川・前川内川という比較的水量の多い2本の支流（川内川）があり，山あいの地にあって，かつては7ヶ所にも水車があったが，早い時期に消失しているようである。

(15) 薩摩郡樋脇町（表15，図13）

樋脇町は，川内川の支流，市比野川沿いに4ヶ所の水車があった。ただし，1と2の水車はほぼ同じ場所である。4の骨粉水車は，当時かなり盛んであったようで，原料の獣骨や製品の骨粉は舟で運送したという。

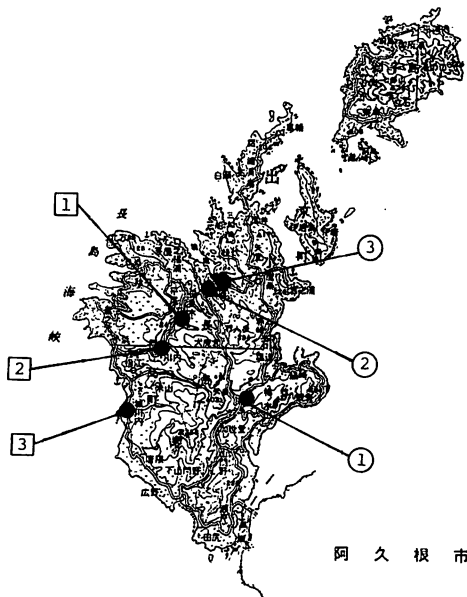


図1 東町・長島町（長島）の水車利用分布

表 1 出水郡東町（長島）における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1-1	川床 川床上	上 掛 け	約 6 m／約 50cm	木	精米・菜種搾油	大正～昭和20年	松 尾 某	山上重登に引継
1-2	〃	〃	〃	〃	〃	昭和20～21年頃	山 上 重 登	排水路現存
2	浦底 浦汐屋	上 掛 け	約 8 m／	木	精米・製糸・（骨粉）	～大正時代	柳 増太郎	長島で一番大きかった
3	浦底 川東	上 掛 け	／	木	精 米	2の創業以前に廃業	井 上 某	

表 2 出水郡長島町（長島）における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	平尾 中南	前 掛 け	約 3 m／	木	菜種搾油	大正12,3年頃～昭和 3,4年頃	山 口 某	
2	指江 川内	上 掛 け	約 5 m／90cm	鉄	精米・精麦	大正10年頃～昭和12,3年頃	中村和一→富安	1, 2代木製→3代目鉄製
3-1	城川内城川内	上 掛 け	4.5 m／90cm	木	精米・精麦	大正 9 年～昭和 2 年	松 木 末次郎	牧作太郎に引継
3-2	〃	〃	〃	〃	〃	昭和 2 年～昭和 7,8年	牧 作太郎	電力に切替

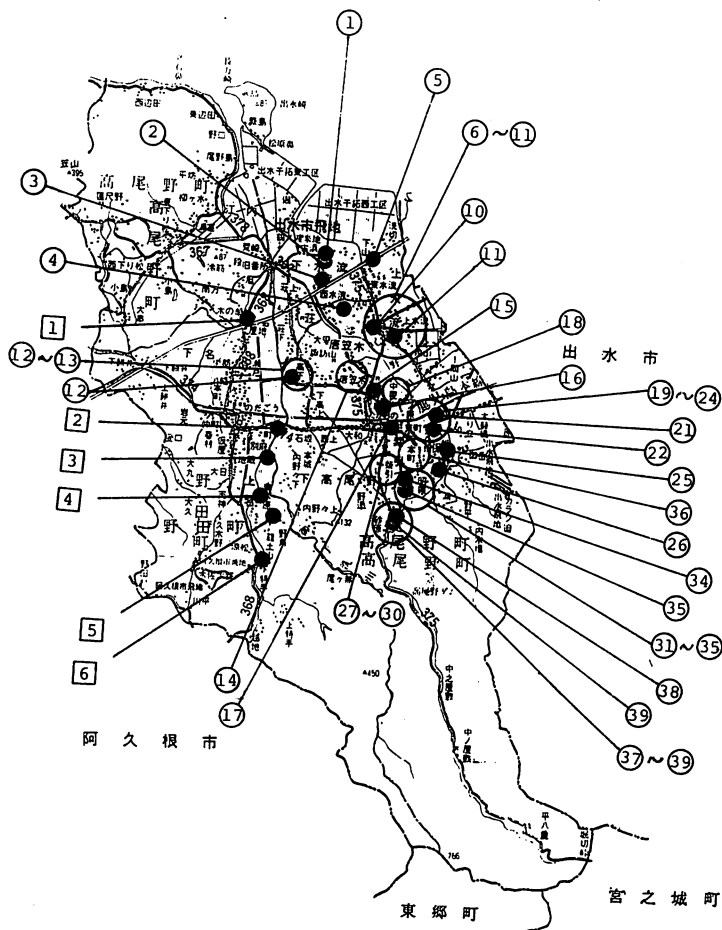


図 2 野田町・高尾野町のの水車利用分布

表3 出水郡野田町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	下名 屋地	前 掛 け		木	精米・製油	～大正時代 (?)	郷 田 喜 助	
2	下名上田多園	上 掛 け	約3 m／	木	精 米	～大正末頃 (?)	伊 東 義 行	
3	上名 別府	前 掛 け	約5 m／	木	精米・製油	～昭和初期頃	井 川 某	
4	上名 青木原	上 掛 け	約3 m／	木	精 米	不 明	園 田 勘 七	
5	上名 野角	前 掛 け	約5 m／	木	精米・製粉	～昭和17,8年 (?)	上 原 某	
6	上名 下持手	上 掛 け	約3 m／	木	精米・製粉	～昭和初期頃	山 下 某	

表4 (その1) 出水郡高尾野町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	下水流	在来型 (?)		木	精 米	大正初期～?	糸 田 与 作	
2	下水流	在来型 (?)		木	骨 粉	明治30年～大正10年	岡 部 喜久造	
3	下水流	在来型 (?)		木	搾 油	大正初期～末頃 (?)	南 蔵 助	
4	下水流西水流	在来型 (?)		木	精 米	明治40年～大正10年頃	福 元 市兵衛	
5	上水流 下山	在来型 (?)		木	精 米	明治末頃～大正5年頃	末 吉 長 八	
6	上水流	在来型 (?)		木	精 米	明治30年～40年頃	外村 勘左エ門	
7	上水流	在来型 (?)		木	精 米	明治37年～末頃	吉 岡 宇 助	
8	上水流	在来型 (?)		木	精 米	明治15年～37年頃	田 中 嘉次郎	
9	上水流	在来型 (?)		木	搾 油	明治44年～昭和25年	森園 郷右衛門	
10	上水流	在来型 (?)		木	精 米	大正初期～末頃	立 石 種 松	
11	上水流	在来型 (?)		木	精米・製油	大正初期～昭和10年頃	黒川 伝右エ門	
12-1	唐笠木下高下	在来型 (?)		木	精 米	明治40年～大正7年	緒 方 又 一	用途変更
12-2	〃	〃		〃	搾 油	大正7年～昭和10年	〃	
13	唐笠木下高下	在来型 (?)		木	精米・搾油	大正7年～?	灰 塚 喜之助	
14	唐笠木唐笠木	在来型 (?)		木	精 米	明治末頃～大正末頃	唐 崎 彦兵衛	
15	唐笠木 麓	在来型 (?)		木	精 米	明治30年～大正5年	出 水 兼 澄	
16	唐笠木 麓	在来型 (?)		木	精 米	～大正初期	本 蔵 某	
17	唐笠木 麓	在来型 (?)		木	精 米	～昭和10年	松 崎 某	
18	唐笠木 中里	在来型 (?)		木	精 米	大正初期～?	田 中 庄 助	
19	大久保上之原	在来型 (?)		木	精 米	明治末頃～大正10年頃	岩 永 亀一郎	
20-1	大久保上之原	在来型 (?)		木	精 米	明治35年～明治末	鬼 塚 万次郎	
20-2	大久保上之原	在来型 (?)		木	精 米	明治末～?	田 島 政 徳	
21	大久保上之原	在来型 (?)		木	骨粉・精米	明治30年～昭和8年	東 畑 善 蔵	
22	大久保上之原	在来型 (?)		木	精米・搾油	大正初期～昭和15年	慶 越 郷 助	
23	大久保上之原	在来型 (?)		木	精米・搾油	大正3年～?	道上 新右エ門	
24	大久保上之原	在来型 (?)		木	製 材	大正初期～昭和初期	赤 瀬 増太郎	
25	大久保松ヶ野	在来型 (?)		木	精 米	明治末～昭和5年頃	石川 新右エ門	
26	大久保大久保	在来型	約5 m／	木	精 米	昭和23年～40年頃	清 藤 正 一	
27	柴引 柴引	在来型 (?)		木	精 米	明治20年～35年	中 村 広太郎	

表4 (その2) 出水郡高尾野町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
28	柴引 柴引	在来型 (?)		木	搾油	明治末～?	鬼塚 権治	
29	柴引 柴引	在来型 (?)		木	澱粉	大正9年～?	加藤 高木	
30	柴引 柴引	在来型 (?)		木	精米	明治15年～大正15年頃	先崎 万蔵	
31	柴引 昭興	在来型 (?)		木	骨粉	明治36年～大正6年	梅木 一郎	
32	柴引 昭興	在来型 (?)		木	精米	大正初期～?	江口 壮右門	
33	柴引 昭興	在来型 (?)		木	骨粉	大正9年～?	鶴田 壮一	
34	柴引 昭興	在来型 (?)		木	精米	～昭和15年頃	橋元 重満	
35	柴引 昭興	在来型 (?)		木	精米	～昭和25年頃	橋元 某	
36	柴引 本町	在来型 (?)		木	精米	大正初期～?	鬼塚 万次郎	
37	柴引 砂原	在来型 (?)		木	精米	明治末～大正10年頃	湯田 芳介	
38	柴引 砂原	在来型 (?)		木	精米	～大正12年	山口 某	
39	柴引 砂原	在来型 (?)		木	精米	～昭和5年	渕上 某	

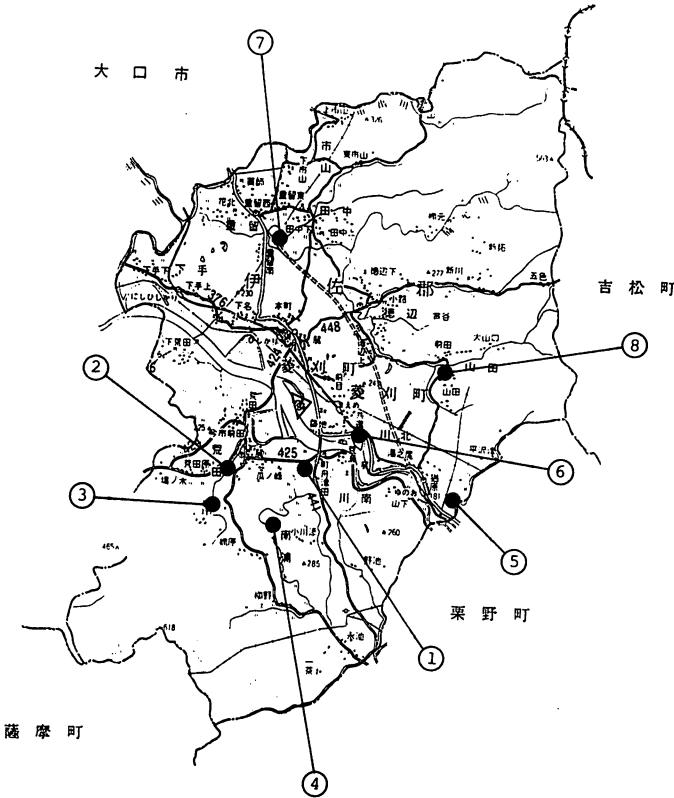


図3 菱刈町の水車利用分布

表5 伊佐郡菱刈町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1-1	川南町舟津田	在 来 型	約4 m／	木	骨 粉	明治30年頃～(1-2)	倉 野 梅太郎	林徳次郎・原口兼一に引継
1-2	〃	〃	〃	〃	骨粉・精米・製粉	(1-1)～昭和34年頃	林徳次郎・原口兼一	
2	荒田 西川	在 来 型		木	精米・製粉	～大正初め頃	亀 甲 某	
3	荒田 名折	在 来 型		木	精 米	不 明	中 村 武 光	
4	南浦 日之丸	在 来 型		木	精 米	不 明		
5-1	川北 平沢津	上 掛 け	4 m／1.1 m	木	たぶ線香・精米	昭和21年～26年	沼田秋彦の兄	沼田秋彦に引継
5-2	〃	〃	〃	〃	〃	昭和26年～36年	沼 田 秋 彦	以後、精米取り止め
5-3	〃	〃	〃	〃	たぶ線香	昭和36年～49年	沼 田 秋 彦	現存・休止（一部破損）
6-1	川北湯之尾滝	前 掛 け	約6 m／	木	骨粉・精米・製粉	大正5年～大正末頃	菱刈生産株式会社 (浜 川 暁 助)	水車2台で営業
6-2	〃	〃	〃	〃	骨 粉	大正末頃～昭和3年	〃	水車1台で営業
6-3	〃	〃	〃	〃	〃	昭和3年～戦時中	県産業組合連合会	水車1台
6-4	〃	タービン		鉄	〃	戦時中～(6-5)	〃	タービン1台に切替
6-5	〃	〃		〃	〃	(6-4)～戦後	湯之尾産業組合	
7	重留 水車前	在 来 型	約5.5 m／	木	精米・精麦	～昭和11,2年頃		
8-1	菱刈金山	在 来 型		木	搗 鉦	明治36年～39年	來 福 重次郎	水車2台「鹿県統計書」
8-2	〃	〃		〃	〃	明治39年～43年頃	八 木 勝次郎	水車1台「鹿県統計書」

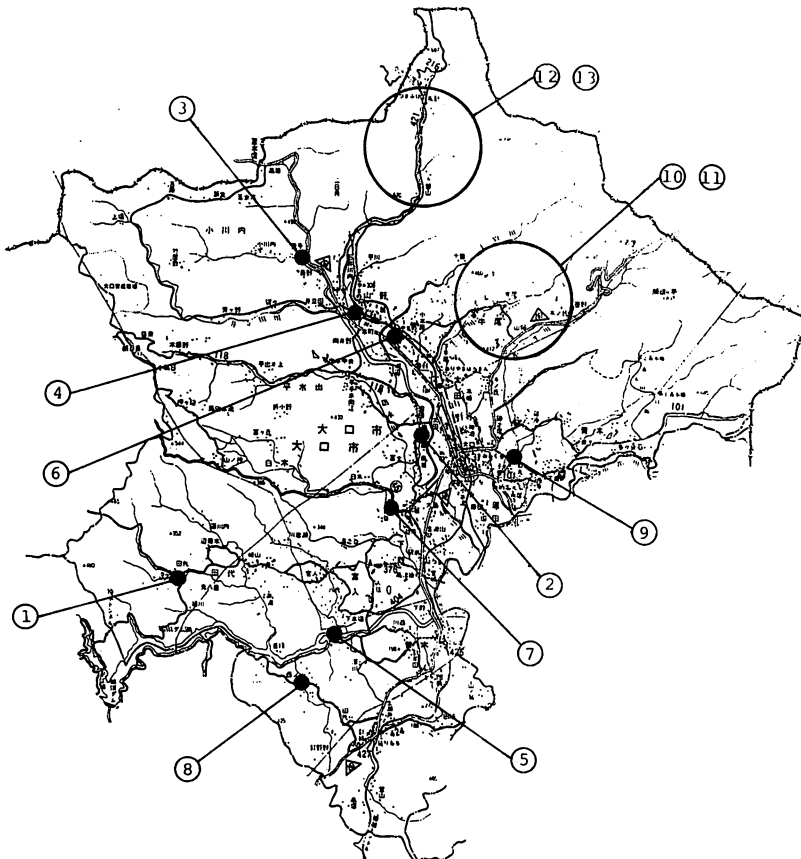


図4 大口市の水車利用分布

表6 大口市における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	田代 田代	タービン		鉄	精 米	～昭和30年頃	熊 本 某	
2-1	鳥巢 園田	上掛け	約4 m/	木	精米・製粉・精麦	大正初期～昭和15年頃	渡 辺 某	渡辺信太郎の父
2-2	〃	縦軸タービン	約40cm/	鉄	〃	昭和15年頃～50年頃	渡 辺 信太郎	現存・休止 〔水車蓋札あり〕
3	山野 荒平	在来型 (?)		木(?)	製 材	不 明	中 村 製材所	
4	山野 上松	在来型 (?)		木(?)	精 米	不 明	不 明	
5	宮人 下木場	上掛け	約4 m/1 m余り	木	精 米	昭和初期～39年	不 明	鶴田ダム湖設置のため廃棄
6	小木原	前掛け	3 m/50cm	木	精 米	～昭和36年頃	不 明	
7	白木羽月上馬場	上掛け		木	精 米	～昭和20年頃	不 明	
8	曾木 西山	上掛け (?)		木	精 米	～昭和25年頃	不 明	
9	上目丸	上掛け	3 m/	木	精米 (冬場のみ)	～昭和28年頃	不 明	
10	牛尾	在来型 (?)		木(?)	搗 鉦	明治27年～39年	牛尾金山鑛業所	水車12台〔明治33年 「鹿県統計書」〕
11	牛尾	在来型 (?)		木(?)	搗 鉦	明治29年～40年	大口金山	水車31台〔明治39年 「鹿県統計書」〕
12	山野	在来型 (?)		木(?)	搗 鉦	明治27年～30年	鑛物製煉所	水車83台〔明治30年 「鹿県統計書」〕
13	山野 布計	在来型 (?)		木(?)	搗 鉦	明治24年～大正4年	布計鑛山鑛業所	水車66台〔明治33年 「鹿県統計書」〕

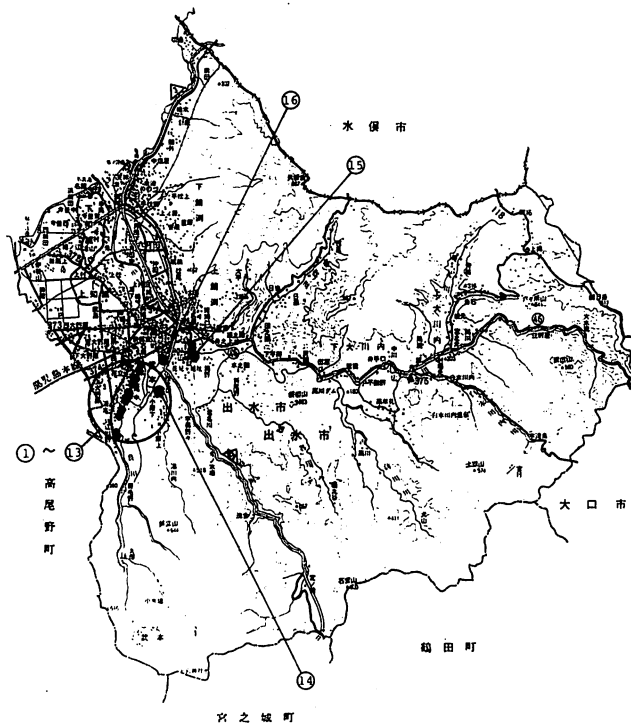


図5 出水市の水車利用分布



表7 出水市における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	江川野	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	大正初め～昭和10年頃	松 原 喜之助	五万石溝に設置
2	江川野	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	大正初め～昭和10年頃	山 上 甚之助	五万石溝に設置
3	上中	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	大正初め～昭和初期頃	篠 原 福太郎	五万石溝に設置
4	上中	前 掛 け	約 2 m／	木	菜種油搾り	大正初め～昭和初期頃	高 江 清 彦	五万石溝に設置
5	上中	前 掛 け	約 2 m／	木	糸 紡 ぎ	～昭和16年頃	松 元 直 則	五万石溝に設置
6	下中	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和30年頃	堂脇武左エ門→谷中某	五万石溝に設置
7	下中	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	脇 田 仁之助	五万石溝に設置
8	下中	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	井 手 治 作	五万石溝に設置
9	上屋	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	麻生 甚左エ門	五万石溝に設置
10	上屋	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	鶴 田 才 重	五万石溝に設置
11	上屋	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	中 村 某	五万石溝に設置
12	野添	前 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和初期頃	橋 口 兼 友	五万石溝に設置
13	野添	上 掛 け	約 2.5 m／	木	精 米	～昭和初期頃	宮 内 十太夫	五万石溝に設置
14	小原	上 掛 け	約 2 m／	木	精 米	～昭和50年頃	若 杉 某	
15	山崎	在来型 (?)		木(?)	精 米		田 実 某	
16	武本	在来型 (?)		木(?)	生 糸 製 造	明治26年～32年	出水製絲分教場	水車1台「鹿県統計書」

表8 阿久根市における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	大川 小麦	前 掛 け	約 3.6 m／	木	精 米	昭和2年頃～28年頃	下 齒 源エ門	水車小屋残存
2	脇本 八郷	在来型 (?)		木(?)	精 米	不 明	不 明	
3-1	鶴川内下田代	前 掛 け	約 4 m／	木	精 米	昭和10年～26年頃	本 勲	タービンに切替
3-2	〃	横軸タービン		鉄	精 米	昭和26年頃～53年頃	本 勲	現存・休止
4	山下	前 掛 け	約 4 m／	木	精米・菜種製油	大正初期～昭和9年	清 水 二郎助	発動機に切替
5	山下 尾崎	前 掛 け	約 4 m／	木	精 米	大正初期～昭和初期	永井野 某	
6	鶴川内 宮原	前 掛 け	約 4 m／	木	精米・精麦	不 明	平 床 善次郎	
7	大曲	前 掛 け	約 3.6 m／	木	製 油	～昭和初期頃	東 某	

表9 川内市における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	尾白江町 南	前 掛 け	約 6 m／ 1.2 m	木	精米・押麦	～大正10年頃	藤 崎 某	
2	中福良町	前 掛 け	約 6 m／ 1.2 m	木	精米・押麦	大正初期～大正13年焼失	多 田 芳 森	
3	矢倉町	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
4	都町 青山	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
5	都町 乗越	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
6	冷水町	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
7	宮里町 植松	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
8	天辰町 皿山	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	
9	高城町 今寺	在来型 (?)		木(?)	精米・押麦 (?)	不 明	不 明	

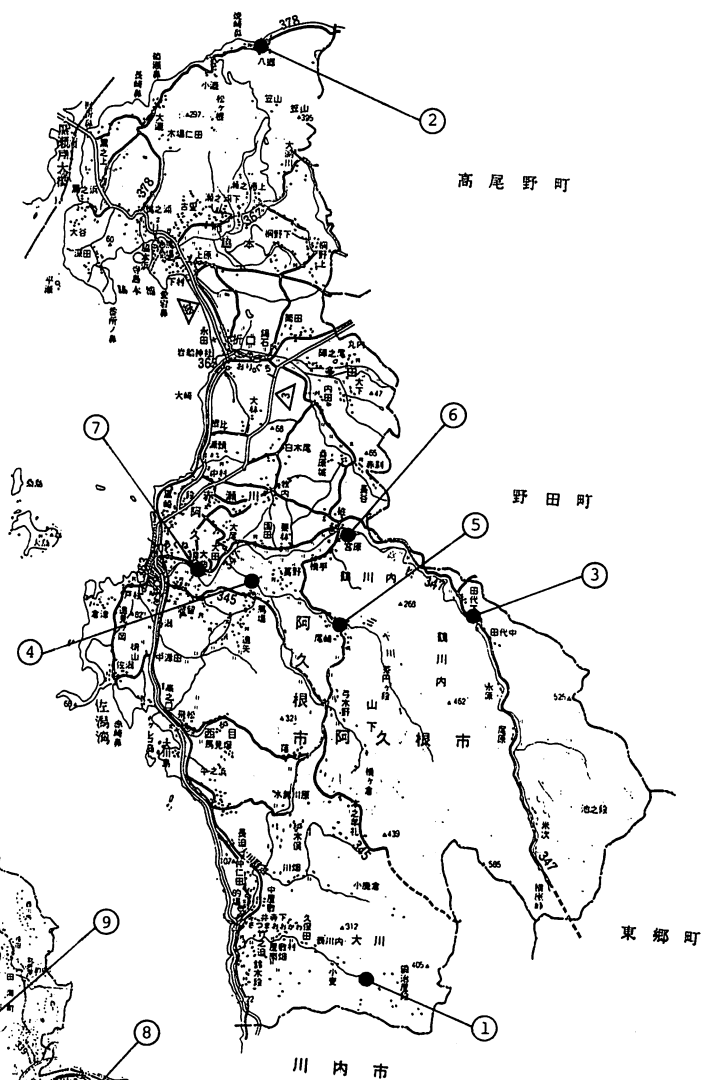


図6 阿久根市の水車利用分布

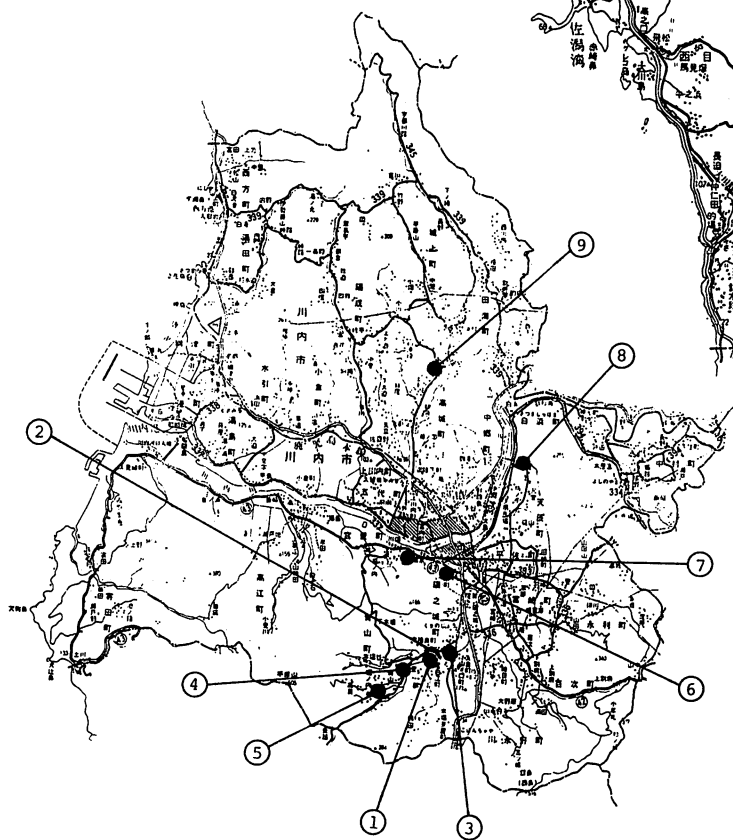


図7 川内市の水車利用分布

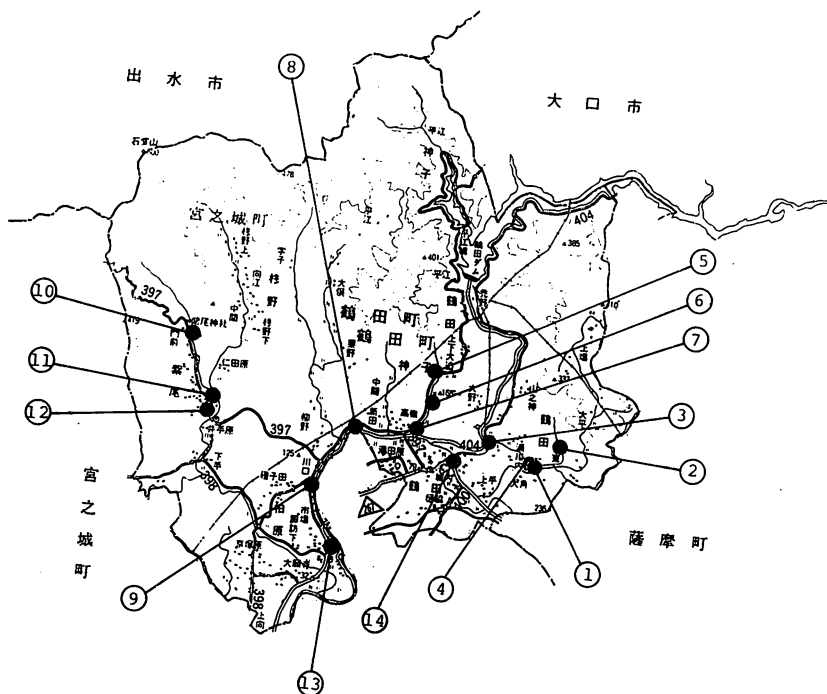


図8 鶴田町・宮之城町飛地の水車利用分布

表10 薩摩郡鶴田町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	鶴田 東	在来型		木	精米	不明	2名(備考欄)	仁科岩次郎・山内喜次郎
2	鶴田 東	在来型		木	精米	不明	3名(備考欄)	岡村四郎右衛門・岡村仁之助・若松勇四郎
3	鶴田 東	流し掛け		木	揚水	不明	岡村 武夫	
4	鶴田 東	在来型		木	精米	不明	枕 辺 源 助	
5	鶴田 麓西	在来型(?)		木(?)	精米	不明	三 石 某	
6	神子 下大迫	在来型(?)		木(?)	精米	不明	下大迫音右衛門	
7	神子 下大迫	在来型(?)		木(?)	精米	不明	下大迫 伊之助	
8	神子 高嶺	前掛け	約4m／	木	精米	不明	高 嶺 弥兵衛	
9	神子 新田	前掛け	約4m／	木	精米	～大正末	玉 利 勇 八	
10	柏原 川口	上掛け		木	骨粉	～明治末か大正初期	久木田 伊兵衛	
11	柏原 小路	前掛け	約3m／約60cm	木	精米・製材	～大正10年頃	末松 高右衛門	
12	紫尾 門前	在来型(?)		木(?)	精米	不明	梅木田 小 助	
13	紫尾 小路	在来型(?)		木(?)	精米	不明	湯 田 邦 岐	
14	紫尾 小路	在来型(?)		木(?)	精米	不明	西 勘 助	

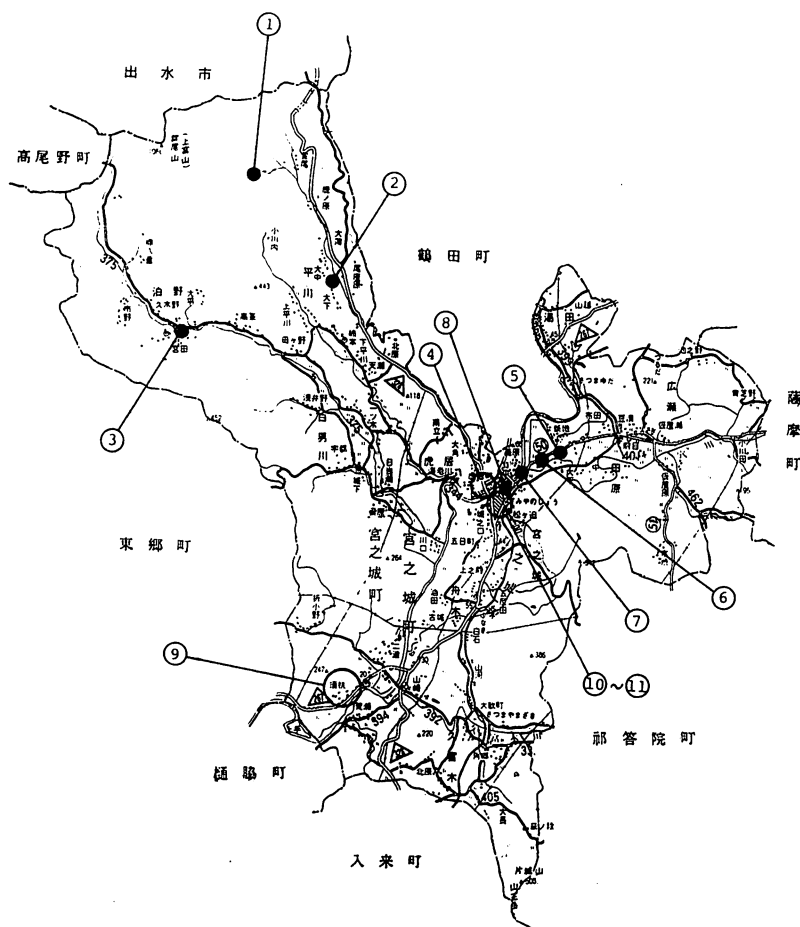


図9 宮之城町（飛地を除く）の水車利用分布

表11 (その1) 薩摩郡宮之城町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	平川 上平川	ベルトン		鉄	発電 (3 kW)	昭和43年～稼働中	山下 準平	稼働 [落差約10m]
2	平川 大中	在来型		木	精米	～昭和初期	不明	
3	泊野 久木野	前掛け		木	製材	不明	不明	
4	虎居	在来型 (?)		木 (?)	精米	不明	不明	
5-1	時吉	上掛け	9 m / 約1 m	木	骨粉・精米	明治30年～昭和10年	岸良喜八郎→猛	タービンに切替
5-2	〃	縦軸タービン		鉄	精米・製粉・精麦	昭和10年～16年頃 (?)	岸良 猛	
5-3	〃	〃		〃	ラミーの繊維生産	昭和16年～20年頃	〃	
5-4	〃	〃		〃	精米・製粉・精麦	昭和22年頃～33年頃	岸良 猛	時吉地区に貸して製茶もする
5-5	〃	〃		〃	〃	昭和33年頃～稼働中	岸良 猛→哲弥	稼働
6	時吉	前掛け	約4 m /	木	綿打ち	昭和20年頃～26年頃	平田 通	

表11（その2） 薩摩郡宮之城町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
7	屋地 川原	前 掛 け	約 6 m／	木	製麺・竹箸製造	昭和初期～19年頃	田 畑 研之丞	宮之城町30年史に写真
8	屋地 川原	前 掛 け		木	精米・骨粉	不 明	不 明	
9	須杭	在 来 型		木	骨 粉	～大正時代	不 明	
10	屋地	在来型 (?)		木(?)	製 糸	明治25年～28年頃	宮ノ城製糸所	水車 1 台「鹿県統計書」
11		在来型 (?)		木(?)	製 糸	大正 3 年～ 8 年頃	松下製絲工場	水車 1 台 (1 H P) 「鹿県統計書」

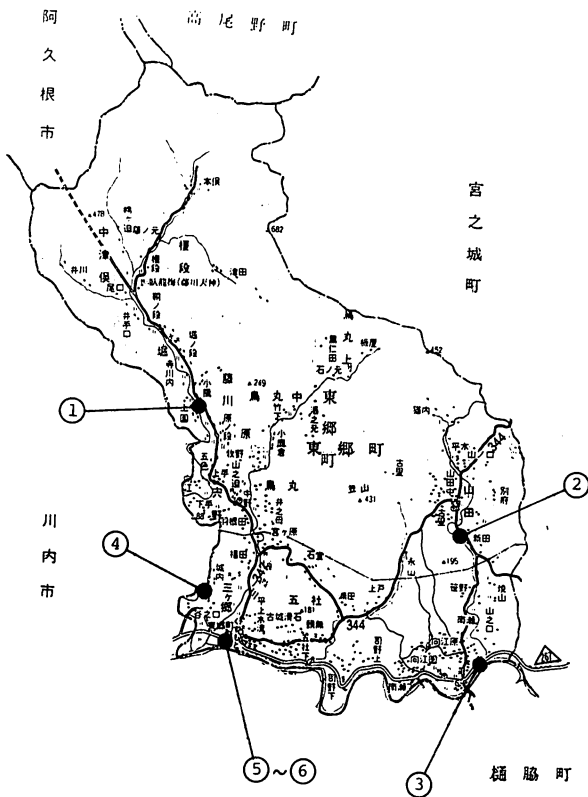


図10 東郷町の水車利用分布

表12 薩摩郡東郷町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	藤川 上園	在 来 型	約 7 m／	木	精 米	～昭和30年頃 (?)	不 明	
2	山田 山山下	在来型 (?)		木(?)	精 米	不 明	不 明	
3	南瀬 山之口	上 掛 け	約 4 m／	木	骨 粉	大正10年頃～昭和 7 年頃	小山田 某	
4	斧淵	在来型 (?)		木(?)	製 糸	明治27年～32年	東郷製糸所	水車 1 台「鹿県統計書」
5	舟倉	在来型 (?)		木(?)	製 糸	明治28年～29年	田代製糸所	水車 2 台「鹿県統計書」
6	舟倉	在来型 (?)		木(?)	製 茶	明治18年のみ (?)	田代製茶場	水車25台 (?)「鹿県統計書」

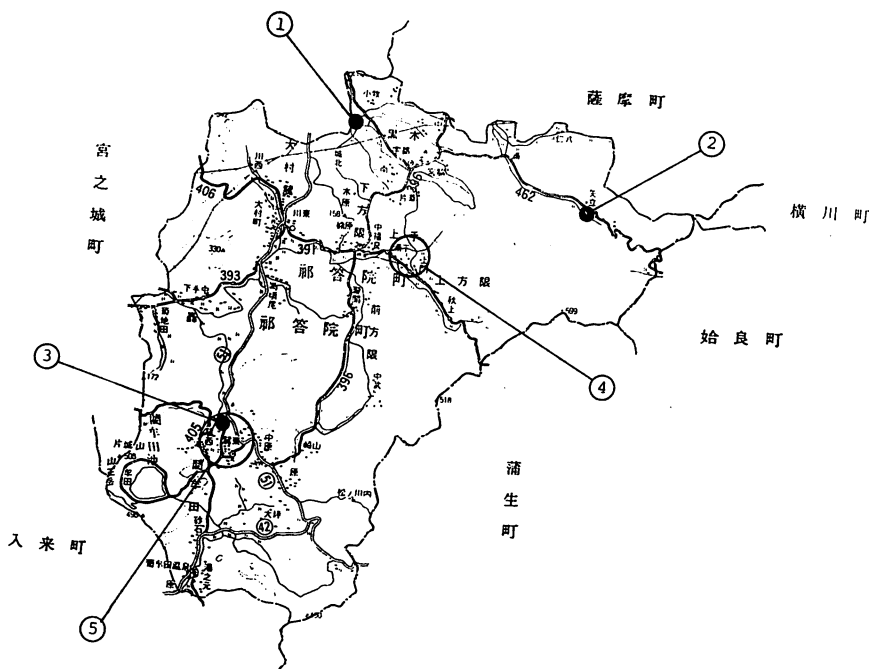


図11 萩答院町の水車利用分布

表13 薩摩郡萩答院町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1-1	黒木 小牧	在 来 型		木	骨 粉	大正初期~大正12年	新 原 清次郎	
1-2	〃	〃	約 7 m/60cm	鉄	精米・発電	大正12年~昭和21年	〃	発電(200V)
1-3	〃	〃	〃	〃	精 米	昭和21年~34年頃	新原清次郎→竜二	
2	黒木 矢立	タービン		鉄	発電(2kW)	昭和27年頃~38年頃	集 落 共 有	代表内山信秋
3	関牟田 麓	在来型(?)		木(?)	精 米	不 明	不 明	
4	上手	在 来 型		木	水車ふいご	慶応(1865~67)年間 ~明治10(1877)年	松ヶ野 某	「藩政時代に於ける 製鐵鑛業」
5	関牟田	在来型(?)		木(?)	製 糸	明治22年~29年	関牟田製糸場	水車11台(?) [明治29年 「鹿児島統計書」]

表14 薩摩郡入来町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	副田	前 掛 け		木	製 糸	明治27年~昭和8年頃	副田共同製糸場	水車1台「鹿児島統計書」
2	副田 平石	前 掛 け		木	不 明	不 明	不 明	ここは「水車」と呼ばれていた
3	浦之名 池頭	在 来 型	約 5 m/	木	精米・製粉	~昭和10年頃(?)	矢 野 某	
4	浦之名 鹿子田	上 掛 け		木	精 米	不 明	不 明	
5	浦之名 山之口	上 掛 け		木	製 材	不 明	不 明	
6	浦之名 蒲生原	在 来 型		木	製 茶	不 明	宮 園 某	「水車」と呼ばれていた
7	浦之名 牟多田	在来型(?)		木	不 明	不 明	水 流 某	水流宅は「水車」と呼ばれていた

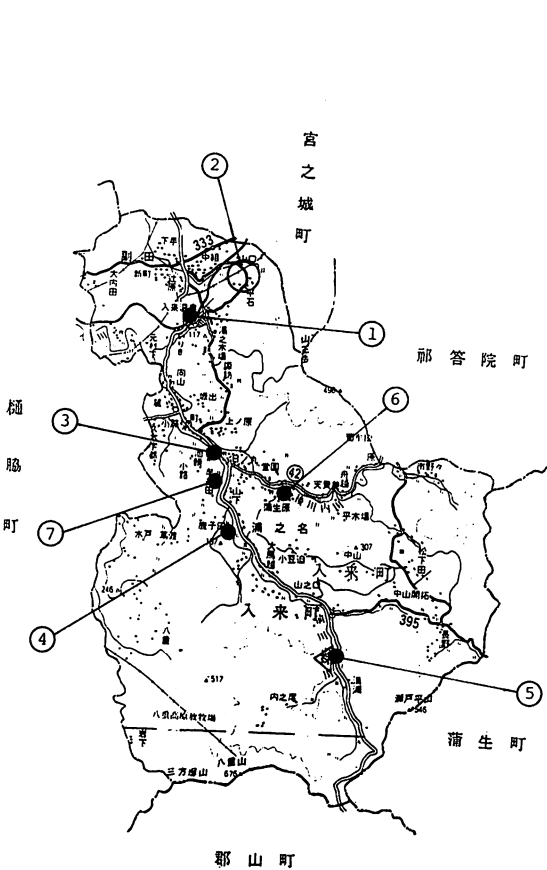


図12 入来町の水車利用分布

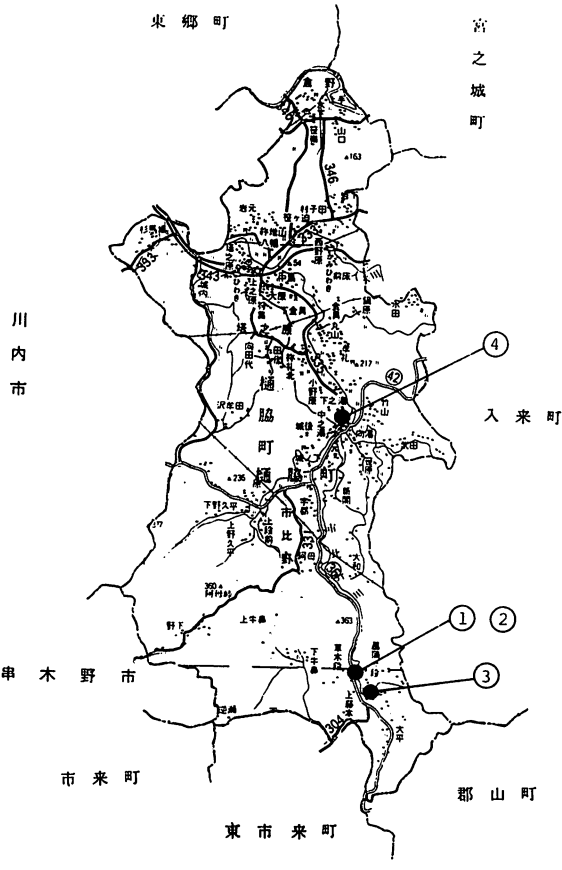


図13 榑脇町の水車利用分布

表15 薩摩郡榑脇町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	市比野草木段	ベルトン		鉄	精米	大正後期～昭和28年	萩木場 文 郎	3つの岩重氏に譲る
2	市比野草木段	タービン		鉄	製材・精米	昭和25年頃～?	萩木場 文 郎	
3-1	市比野上藤本	上 掛 け		木	精米	大正7年頃～昭和27年	岩 重 正 吉	ベルトンに切替
3-2	〃	ベルトン		鉄	精米・製粉・精麦	昭和28年～40年頃	岩重正吉→清利	現在、郷土館に保管
4	市比野中之湯	上 掛 け	約5 m／	木	骨 粉	～昭和9年頃	今 井 興之助	

#### 4. あとがき

鹿児島県内を分割した7地域のうち、北薩地域(4市11町)の水車利用実績について水車用途別に集計してみると、大口市と菱刈町の搗鉦水車が194ヶ所、精米・製粉・精麦等の水車が93ヶ所(現存3台)、精米と製材、搾油、線香等の兼用水車が11ヶ所、製糸用水車が10ヶ所、骨粉用7ヶ所、精米・骨粉用5ヶ所、搾油用7ヶ所、製材用4ヶ所、発電用2ヶ所(稼動1台)、線香用1ヶ所(現存)等、総数342ヶ所あったことが判明した。

この記録はもちろん完全なものではなく、実際には調査漏れのものも少なくないと思われる。しかし、鹿児島県内全域にわたったこのような記録は全く無く、今後各市町村においても、これを参考にしてさらに充実したものにまとめていただければ、望外の喜びである。

最後に、この調査に際しては、各市町村の職員の方々を始め、多くの郷土史家や古老の方々の非常に熱心なご協力を無くしては、できなかったことを付記し、心から感謝と御礼の意を表します。また、地図の作成に

際しては大学院生の三角和幸君、大同浩生君、岩本竜一君、表の印刷等に際しては十田正文技官に、それぞれ全面的な協力を頂いたことに感謝致します。

#### 引用文献

- 1) 信夫清三郎、近代日本産業史序説、昭和21(1946)年、p.195、日本評論社
- 2) 島袋盛範、藩政時代に於ける製鐵鑛業、昭和7(1932)年、p.20
- 3) 地方史研究協議会編、日本産業史体系8 九州地方篇、昭和35(1960)年、p.208、東京大学出版会
- 4) 松村博久・門 久義、鹿児島県における水車利用の実態、技術と文明、5巻3号(1990年)、pp.29~46
- 5) 鹿児島県、鹿児島県勸業年報 明治21~25年
- 6) 鹿児島県、鹿児島県統計書 明治26年~大正13年
- 7) 高尾野町郷土誌編纂委員会、高尾野町郷土誌、昭和44(1969)年、pp.389~397
- 8) 鶴田町郷土史研究会、会報33号、昭和60(1985)年